



TITLE:

臨床教育学講座2003年度授業科目 一覧

AUTHOR(S):

CITATION:

臨床教育学講座2003年度授業科目一覧. 臨床教育人間学 2004, 6: 115-122

ISSUE DATE:

2004-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197003>

RIGHT:

臨床教育学講座 2003 年度授業科目一覧

[学部提供科目]

■臨床教育学基礎演習Ⅰ（皆藤章・矢野智司）

臨床教育学の基礎となる〈考え方〉〈思考法〉を、演習というスタイルをとおして体験的に学んでいく。

教育を巡るさまざまな事象について、受講生がみずからの興味・関心を率直に「語る」ことから始めたい。そして、個々の「語り」をとおして、さらに多次元からの多様な意味をもつ「語り」が生まれてくることを受講生個々が主体的に関与していく。したがって、「語り」のテーマは授業のなかでおのずと生まれてくると言うことができるが、適宜、担当教官から素材を提供することがある。

なお、前期は主として皆藤章が担当する。

■臨床教育学基礎演習Ⅱ（矢野智司・皆藤章）

ハイブリッドとしての臨床教育学は、教育学や臨床心理学や教育社会学といったさまざまな学問分野を母胎として、新たな学問分野を形成しつつある。したがって、臨床教育学という領野では、さまざまな方法やテーマが出会い互いに結びあっている。その錯綜したテーマ群は、臨床教育学の学問論・方法論、臨床教育学がその思考を展開する場、臨床教育学が教育人間学と出会うテーマ群といったように分類すると、次の三部に分けることができるのではないかと思う。

第Ⅰ部 臨床教育学とは何か（臨床教育学をどのように構想するのか）

第Ⅱ部 「現場」で考える臨床教育学（教師・授業・クラスの意味の作りかえに向けて）

第Ⅲ部 「人間」を考える臨床教育学（語り・身体・作法・超越からみた臨床教育学の可能性）

以上の三部に分けて、それぞれに関わる臨床教育学の基本的な文献を読む。

■臨床教育学講読演習Ⅰ (吉田敦彦：大阪女子大学助教授)

ホリスティック (Holistic <holos> whole, heal, holy) な教育に関する英語文献を講読する。*Holistic Education Review* 誌所収の諸論文、J. Miller の未邦訳の著作 *Education and the Soul* あるいは *Nurturing our Wholeness* 等から受講者の関心に配慮して文献を選ぶ。英語読解 (鍵概念については訳語にもこだわる精読) と併せて、内容的なコメントも積極的に行う。(「ホリスティック教育」については吉田敦彦著『ホリスティック教育論』日本評論社を参照。)

■臨床教育学講読演習Ⅱ (吉田敦彦：大阪女子大学助教授)

ホリスティック (Holistic <holos> whole, heal, holy) な教育に関する英語文献を講読する。*Holistic Education Review* 誌所収の諸論文、J. Miller の未邦訳の著作 *Education and the Soul* あるいは *Nurturing our Wholeness* 等から受講者の関心に配慮して文献を選ぶ。英語読解 (鍵概念については訳語にもこだわる精読) と併せて、内容的なコメントも積極的に行う。(「ホリスティック教育」については吉田敦彦著『ホリスティック教育論』日本評論社を参照。)

■臨床教育学概論Ⅰ (皆藤章)

臨床教育学の基本的な考え方について概説する。

学問には通常、当該の学問が成立してきた歴史的経緯があり、概論は通常そうした歴史的経緯から説き起こし、当該の学問がどのような発展を辿って今日に到っているのかを講じるというスタイルで進められる印象を受講生はもっているのではないと思われる。本講義でもそうしたスタイルをもちろん重視するが、それ以上に、臨床教育学という学問が包含する「人間の生」という動態に着目し、そこに「いかに関わるのか」というような、われわれの側の在り様に焦点づけていきたい。

■臨床教育学専門ゼミナールⅠ (皆藤章・大山泰宏)

人間の表現によるさまざまな素材に主体的・主観的に関わることをとおして、かかわる主観・主体の側から素材を「語る」というプロセスを演習する。素材に対し距離をとって客観的に理解していく従来の科学的な思考法ではなく、そこに〈私〉を入れ込んで素材に関与したときに開かれてくる地平を「語る」という方法論で展開していく。

参加者は、一度はかならず発表すること。探求の対象となる素材を、個々がみずから見出し、みずからの仕方でその素材に関わり、みずからのことばでその関わりのプロセスを「語る」ことになる。なお、探求の対象となる素材は、専門文献にかぎらず、文学作品、詩、音楽、漫画など、多様な領域に渡ってもよい。それらを、臨床教育学という学問によって探求していく態度、思考法、方法論を体験的に学んでいくことになる。

なお、卒業論文の構想発表もここで行う。

■臨床教育学専門ゼミナールⅡ（矢野智司・田中毎実）

物語を通して自己と世界との関係を構築しているとするなら、そのような物語の多くは人から教えられたり、知らないうちに人から模倣したものだ。とりわけ、学校は国民国家のエージェントとして、このような物語を流布することに大きな影響力を持ってきた。このような教材としての物語、あるいは教育関係のなかで交わされる物語を「教育における物語」と呼んでみる。また、この教師と子どもとの関係についても、私たちは多くの物語をもっている。小説から新聞記事にいたるまで、「教育」というテーマの物語は日々語られている。この教育の関係についての物語を「教育についての物語」と呼んでみる。さらに、教育学研究の領域では、近代理念が批判されるにしたがい、「教育」もまた近代の理念「大きな物語」にすぎないということ、そして教育という物語は正当性を主張する根拠をもっていないことが論じられもした。このような「大きな物語」としての教育の物語を「教育という物語」と呼んでみる。

教育の物語を、実践レベルで交わされる「教育における物語」と、その実践レベルを語る物語としての「教育についての物語」と、その「教育についての物語」をまとめあげる「教育という物語」という、抽象レベルの異なる三つの物語の複合体として捉えたうえで、演習では、物語の批判的吟味にとどまらず、「物語」がいかにより自己と世界との関係を構成していくのか、また「物語」がどのように自己や世界を開示しあるいは隠蔽するのか、さらに「物語」が物語内部におけるパラドックスや矛盾から、臨界点に達して崩れ新たな物語に変容するのか、といった物語をめぐる物語を考えてみたい。

■教育人間学概論Ⅰ（矢野智司）

君たちが受けてきた学校教育は、君たちにとってどのような経験だっただろうか。自分がいちばん変わったのは、どのようなときだっただろうか。それは教育の成果といえるのだら

うか。自分の教育経験を振りかえりながら、一步一步「教育」という言葉にまわりつく、重苦しい生命を失った言葉の鎖をとりのぞき、教育という世界に生命の風穴を開けていこう。

そのためには、いまある教育という事象を、別のものにとらえなおすことのできる自己自身の変容（意味生成）が必要となる。

したがって、この講義では受講者にも能動的な参加が要請されることになる。

授業では、テキストとして拙著『ソクラテスのダブル・バインド』（世織書房）を使用しながら、学習や遊び・メタファー・ユーモアといった具体的な人間の生の変容の事象を手がかりに、意味生成の教育人間学を論じる。

■教育人間学概論Ⅱ（矢野智司）

生成と発達の教育人間学：自己に対立する課題を克服するやりとりを「経験」と名づけ、「経験」することによって自己がより有能なものへと漸次成長していく過程を「発達」と呼んでみよう。そして、自己が自己と世界との境を失い溶解する在り方を「体験」と名づけ、「体験」によって自己が変容する瞬間の在り方を「生成」と呼んでみる。最初の系は、普通「教育」と呼ばれているもので、基本的には共同体の内部で成熟した大人になっていく人間の変容を言い表している。後の系は、「喜びにあふれる遊戯」や「非知に触れるノンセンス」や「純粹贈与者との出会い」あるいは「野性の動物との出会い」にみられるように、共同体の外部へと開かれてきた生きものに触れていく変容の在り方を示している。戦後日本の教育学は、「発達」を目的とする人間形成について探求してきたが、この二つの系を手がかりに、「教育」と呼ばれる事象について考えてみることにする。

〔大学院科目〕

■臨床教育学研究Ⅰ（矢野智司・皆藤章）

臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を幅広く精力的に読み論文指導を行う。また、博士論文作成に向けての指導を行う。

■臨床教育学研究Ⅱ（矢野智司・皆藤章）

臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を個々のテーマに収斂させて精力的に読み、博士論文作成に向けての指導を行う。

■臨床教育人間学特論Ⅰ（集中講義）（高橋勝：横浜国立大学教授）

本講義では、主に 1980 年代以降のドイツにおける教育人間学の多様な展開を考察しながら、経験、ミメシス、主体、他者などの鍵概念が、人間形成を読み解く問題群として、どのように構成され、浮上してきたのかを検討する。その際に、フッサールの現象学、ハイデガーの基礎的存在論を、現代の教育人間学の方法の基底をなすものとして考察したい。

具体的には、Ch. ヴルフ編著『教育人間学入門』（玉川大学出版部、2001 年）、Ch. Wulf: *Anthropologie der Erziehung*, 2001（現在翻訳中）、その他の文献資料を使用したい。

■臨床教育学特論Ⅱ（集中講義）（赤坂憲雄：東北芸術工科大学教授）

『遠野物語』をテキストとして、人間とは何か、家族とは、村とは何か、さらに社会とは何か……といった問いに向けて、多元的な眼差しをもってアプローチを試みる。参加型の授業を期待する。

■臨床教育学演習Ⅰ（矢野智司・田中毎実）

もっとも普遍的な他者との関わりは、「交換」という営みのうちにみることができる。フランス民族学の父ともいえるモースの「贈与交換」の理論は、構造主義の成立に大きな影響を与えた研究としてよく知られているが、この理論は近代の市場交換以前の太古の経済の在り方を示すだけでなく、全体的社会的事実として、近代以前の人間関係の基本的な姿を明らかにするものであった。今日、すべての人間的な関わりが市場経済の原理で説明されているとき、サービスやケアや看護やボランティア活動あるいは教育といったような、市場経済的な交換になじまない他者に関わる事象の独自の在り方を明らかにしようとするとき、モースの贈与交換論は大きな思想的源泉となっている。

しかし、「贈与交換」は贈与であるとしても、贈与した相手からの見返りを計算する贈与であり、他者と関わる時の制度的次元しか明らかにすることはできない。ボランティア活動に端的にみられるように、なぜ制度がないところで、最初に他者にたいして自己を差し出し、手をさしのべるのかについては贈与交換論では十分に説明することができない。制度としてではなく、出来事として捉えるとき、他者との関わりは「純粹贈与」の次元をもっており、ケアや看護や教育の中心を考えるには、この次元を捉えることがとても重要である。この演習では、「交換」「贈与交換」「純粹贈与」「相互性」に関わる文献を読みながら、臨床教育学に関わる諸テーマを論じ合うことになる。

■臨床教育学演習Ⅱ (皆藤章・大山泰宏)

哲学、文化人類学、民俗学、社会学、宗教学、心理学など、人間および人間の営みを探求してきたさまざまな学問領域の「語り」との対話を試み、それをとおして展開される世界を主体的に「語る」ことから、「人間とは何か」「『生』とは何か」というテーマを、臨床教育学の問いとして引き受けることを試みる。

授業の最初の回に、発表者のスケジュールを決定し、発表者は予定された回にそれぞれの興味・関心領域から上述の内容に即した発表を行って、その後ディスカッションしていく。したがって、発表の素材は基本的に受講生が見出すことになる。なお、修士一回生は卒業論文(提出論文)内容とそこからの展開について、博士一回生は修士論文(提出論文)内容とそこからの展開についての発表を基本とする。

■学校臨床学演習(集中講義)(皆藤章・倉光修：大阪大学教授)

基本的に「事例研究」を中心に進めていく。ここで言う「事例研究」とは、臨床心理学が伝統的に行ってきたスタイルをかならずしも意味しない。学校現場で生じているさまざまな事態そのものが「事例」であるという認識に立って、学校現場における生徒との個々のやりとりから、広く学校という人間集団が抱える場の機能に到るまで、裾野を広くとって実践的な議論を行っていきたい。いわば、「学校」がひとつの「事例」であるということができる。

本演習は、守秘義務などの倫理規定の遵守を必要とするため、受講希望者は、あらかじめ担当教官(皆藤章)の了承を得ること。また、受講に当たっては、希望者は全員、事例を提供できることが必要となる。

■臨床教育学課題演習Ⅰ(吉田敦彦：大阪女子大学助教授)

1) 教育学的な関心からはホリスティック教育論、2) 心理臨床的な関心からはケアリング・援助的関係論、そして、3) 両者に共通する人間学的な基礎としてブーバー思想。これら3つの課題領域をゆるやかに設定しつつ、それぞれに関連する文献を受講者の関心にしながら選定する。その文献に関する研究発表と討議を中心とする。

■臨床教育学課題演習Ⅱ(皆藤章)

本年度は、文化人類学、民族学、宗教学など、臨床教育学・臨床心理学の周縁領域を中心に必要と思われる文献を読んだり、メディア教材を活用したり、フィールドワークなどの体

験そのもののレポートを聴いたりすることから、そこにおける知見・内容を、たんに理解するのみならず、人間の営みの視座から主観的・主体的に引き受けていくことをとおして、「臨床教育学」という学問領域を際立たせることを試みる。

具体的にどのようなスタイルで行うかは、受講者のニーズに照らしながら決定していく。受講希望者は、あらかじめ担当教官（皆藤章）と相談すること。

■子どもの人間学演習（矢野智司）

登場する動物は人間のように言葉話すのだが、擬人法のように人間中心主義的な世界にすべてがかわるわけではなく、むしろ反対に、人間の方が、他の草木虫魚あるいは鉱物といったすべての存在者の方に「世界化」される生の技法がある。このことを児童文学で実現したのは宮沢賢治である。

賢治が、他者のもつ異質性を読者に贈与することができたのは、賢治特有の方法論によって。賢治の作品のなかには、宇宙と交感する人の姿がしばしば描かれている。この宇宙は多岐に渡っており細やかなリストに仕上げることができるだろう。星座、銀河系、鉱物、植物、昆虫、動物、さらに雲・霧・雨・風・雪といった大気の諸相……。この交感の体験の表現を実現しているのが、賢治の擬人法である。動植物のみならず、鉱物のような無機物でさえも、賢治の世界ではまるで人間のように言葉話すのだ。賢治の擬人法は、通常の擬人法のモノローグとまったく正反対のポリフォニー（多声法）の語りを可能にする生の技法である。

賢治の擬人法は、人間の声だけが語る世界を、多数多様な存在者たちの多声がたがいに響きあう世界に変えてしまう。この技法は賢治によって「心象スケッチ」と名づけられた実験的な生の技法によっている。しかし、それは人間中心主義にたって、世界を主観化＝人間化＝擬人化することではない。反対に、人間の方が世界化＝脱人間化される生の技法と言い換えたほうが適切である。この演習では、この宮沢賢治の生の技法を手がかりに、子どもが世界と関わる体験の諸相について考えてみたい。

■教育相談学実習Ⅰ（皆藤章・大山泰宏）

本実習は、昨年度に開講した「臨床教育実践学実習Ⅰ」の内容を引き継ぎ発展させていくとするものである。心理臨床に関する研究プロジェクトに関わることを通して学びを展開していくという、research-basedの実習であり、参加者には能動的な参加が必要とされる。

昨年度は事例研究法における新たな試みを、メディア機器を用いることで探求し、心理臨床家の主体的関与という視角から検討を加えた。その成果は、「日本心理臨床学会第21回大会」「日本箱庭療法学会第16回大会」において発表された。

本年度は、昨年度の授業および学会発表での反省を踏まえて、〈心理臨床家の主体的関与に関する研究——事例研究法の開発的研究を通して (The Study on the Commitment of Psychotherapist — through the Research and Development of Case Methods)〉と題する研究を行う。ここでは、主に箱庭や風景構成法などの模擬事例の制作過程を映像記録することを通して、心理臨床家が事例に関わるときの関与の仕方や視点の分析、さらには、心理臨床家の訓練システムの開発を視野に入れた共同研究をおこなうこととなる。その成果は、日本心理臨床学会や箱庭療法学会において発表する予定であり、そのための学問的検討は当然のこと、プレゼンテーションの仕方や器材使用などの習熟にも努めていくこととなる。

■教育相談学実習Ⅱ（皆藤章・大山泰宏）

本実習は、昨年度に開講した「臨床教育実践学実習Ⅱ」の内容を引き継ぎ発展させていくとするものである。

前期の「教育相談学実習Ⅰ」の成果、および学会発表の結果をふまえ、心理臨床家の事例への関わり方に関する研究を進展させていく。受講者は、「教育相談学実習Ⅰ」を受講していることが望ましく、授業内容もそれを前提に展開される。

ここでは、実際に自分たちで作成した映像メディアを、実際に事例研究法に応用・実践することで、参加者の心理臨床家としての視点や関与を醸成することを主たる目的とする。また、映像メディアにもとづく事例研究法だけでなく、レジュメによる発表方式や、インシデント・プロセス法をはじめとする、他の形式の事例研究法に関しても検討を行いたい。